

連載
映画から
見えてくる
世界
第10回

独裁と民主のあいだ

『オール・ザ・キングスメン』をめぐる

木下 昌明 (映画評論家)



いつたい映画を批評するとはどういうことなのか？ 一本の映画をみて、それがよかつたとか、俳優のだれそれが魅力的だったとかを中心に語るのも一つの批評であり、それはそれで大切であるが、わたしの批評はどうも違うようだ。これはと思う映画を素材に、それを監督（脚本家）がどのような意図でつくったかということから、映画の背景となる社会や政治や歴史的な問題に関心が向かい、そこから映画が描いたもの（描ききれなかったもの）を追究する——そのために時には当の映画から離れた問題もひき出してくるが、本人はそれも一つの批評と考えて

いる。そこでわたしの批評の一例として、いま上映中の『オール・ザ・キングスメン』についてかいた『サンデー毎日』四月八日号の短評を再録し、これをなぜ取り上げたかふれることから始めたい。見出しは「大統領になりそこねた男／実在した知事をモデルの映画」とした。

〈知事選の季節がやってきた。時期を同じくしてステイヴン・ゼイリアン監督の映画「オール・ザ・キングスメン」が4月7日から全国公開される。主人公は、1935年にルイジアナ州会議事堂で暗殺されたヒューイ・

P・ロング元知事がモデル。かれは長
広舌をふるう扇動家で、大統領になる
野望を抱いていた。ただし映画は、か
れをモデルにした同名の小説(49年に
映画化も)を基にしている。主人公の
名はウイリー・スターク。個性派の
ショーン・ペンが演じているが、最初
から悪党にみえるのが難点だ。

ウイリーは若いころ実直な郡の出納
官だった。そこで小学校建設の不正を
知り、街角にたつて役人の汚職を訴え
るが、だれも耳を貸さずに職を失う。
その後、欠陥工事で大惨事が起きて、
初めてかれの主張が認められる。かれ
は新聞記者(ジュード・ロウ)の協力
をえて、人気者になり、知事選にまで
かりだされる。それは他候補の票を割
るための当て馬だった。このからくり
に怒ってウイリーは本音を民衆にぶち
まけ、ついに知事に当選する。かれは
記者を参謀にして当初は公約を果たす
ものの、地位を保つために「悪」とも

結託。傲岸不遜になり、独裁政治を築
いていく。

映画で、知事が「人間はすべて王様」
と酔いしれるように歌うシーンがあ
る。王様になったのはウイリーだけ
で、民衆は野望のために利用されたに
すぎなかった。

興味深いのは記録映画「クリントン
を大統領にした男」の政治コンサルタ
ントのカーヴィルが映画に名をつらね
ていることだ。かれは、女性問題で苦
戦していたクリントンをあの手この手
で大統領にした参謀。その人物がどん
な意図で製作に携わったかを考えてみ
るのも一興かもしれない。長く権力の
座に座ろうと画策する人間は、民衆を
道連れに、腐っていく。

これは今度の統一地方選挙を念頭に
おいて批評したものだ。わたしには映
画の主人公ウイリーと石原慎太郎都知
事が二重写しにうつったからだ。

映画は試写室で二度みた。そのあと
一九四九年につくられたロバート・
ロッセン監督の『オール・ザ・キング
スメン』をビデオレンタル店で借りて
みた。これは昔一度みたが、ほとんど
記憶に残っていなかった。改めてみる
と、新作に似ているところ似ていない
ところがあり、比較しながらみること
ができた。49年版(旧作)は、ウイリー
がまだ若く郡の出納官時代から年を
追って、かれが政治に野望を抱きはじ
めるとともに選挙のからくり(似た候
補の票を割るために利用される)がわ
かってそれを暴露し、かれ自身も汚れ
た政治手法を身につけていく過程がテ
ンポよく描かれていた。もう一人の主
人公ともいえるべき新聞記者のジャック
も、初め実直そうなウイリーにひか
れ、選挙の応援記事をかいていたが、
そのために新聞社をクビになり、ウイ
リーの下で参謀格として働くように
なっていく過程もわかりやすく点描さ

れていた。また、ジャックの恋人アンが、巧みに弁舌をふるうウイリーにひかれ、二人が不倫関係となるのも理解できたし、ウイリーが医者であるアンの兄に暗殺された事情もよくわかった。これによって旧作のスターク像は、一方で、貧しい農民層に自分も同じ農民であることを農民のことばで語りながら、かれらを味方につけていったこと、他方で、知事になるや自らの野望のために策謀をめぐらし、次第に傲慢になり、墮落していったこと、そのかれの二面性が簡明（単純）に描かれて納得がいった。

この旧作がつくられた時代、アメリカではマッカーシー旋風がふきあれていた。それにもかかわらず映画はこの年のアカデミー賞作品賞をはじめいくつかの賞に輝いた。一説によると、この時のこの賞はハリウッド人の赤狩りに対する抵抗の証でもあったとされている。しかし、その結果、ロッセン監

督は聴聞会に召還され、一度は証言を拒否するが、共産党員だったことがバレて、大勢の党員の名前を挙げて転向した。なぜ、ロッセン監督がこの作品で召還されたかわからないが、推測するに、マッカーシー上院議員にとって、政治家の傲慢と墮落を批判するような映画にはがまんならなかったからだろう。

これに対して新作はどうだったかといえ、全体にメロドラマ仕立てになっていた。特にジャックと恋人アンとの青春時代の恋愛シーンも挿入され、なぜアンとはうまくいかなかったのか、そのいきさつにも時間をさいていて、彼女がのちにウイリーと関係を結ぶようになったのは、旧作のように単純にその政治家としての魅力にひかれたからではなく、もつと屈折したものであったことに光をあてていた。しかし、その分、ウイリーの魅力はなおざりにされ、かれが変貌していく過程も

わかりにくいものになっていた。旧作と違って、ウイリーがすでに知事になり、ジャックもその下で働いているところからはじまっていることも大きかった。若き日の彼らの出会いは、回想シーンとしてとらえられていたの、実直だったウイリーがどうして政治の「悪」に染まっていたのか、わかりづらくなっていたからだ。

ところが原作のロバート・ベン・ウーレン『すべて王の臣』（白水社）を読むと、旧作より新作の方が原作に忠実であることがわかった。小説でも出だしから、ウイリーは知事になっていて、ジャックとアンとのこじれた関係も原作どおりだった。ジャックの父代わりの判事との関係などの複雑で入りくんだ人間ドラマも、原作をふまえてのこととわかった。さらにいえばジャックとアンの青春模様も原作は紙数を費やし、この部分だけでもけっこう楽しめた。しかし、この人間ドラマ

に照明をあてることで、政治ドラマの方はみえにくくなった。その結果、ウィリー像は、はじめから悪党にしかみえない描き方になって、アクチュアルなはずの政治問題が平板な悪党政治家の末路のドラマに成り下がった——その意味では、新作は旧作よりも原作に寄りそったことでかえって底の浅いメロドラマと化したといえよう。

では、原作のモデルになった実在のヒューイ・P・ロングとはどんな人物だったか。わたしはこの人物像に興味を抱き、ネットで探し、三宅昭良『アメリカン・ファシズム——ロングとローズヴェルト』（講談社）を入手した（ただし絶版）。それと同時に、ウォーレンの原作を基にしないで、ロングの政治活動を描いた『キングフィッシュ——大統領への挑戦』という九五五年製作の映画がビデオ化されていることも知った。これを見ると、三宅本で分析されたロング像にもっとも近い映画と

わかった。また、かれの暗殺も『オール・ザ・キングスメン』で描かれたような男女の関係がからんだ事件としてではなく、何やら不可解で卑小ともとれる暗殺として描かれていた。それは歴代の政治家の暗殺をみても「どうして？」と首をかしげたくなるような動機もはつきりしない犯人のケースとよく似ていた。

では、ロングはどんな政治家だったか？ かれは南部ルイジアナの自営農家であったが、貧困層の一員で、若いころからセールスマンとして、人を説得する話術を身につけていた。かれは早くから大統領を夢見、妻の協力で大学に入り、弁護士となつて鉄道管理委員の選挙で当選し、知事には一度落選するが当選する。このときからロングは道路や橋の建設で失業者の雇用をふやし、貧しい人々に教科書の無料配布を公約して実行し、大衆の絶大な支持をとりつけることに成功する。彼は

持論であるSOW運動（富の再分配）を展開し、知事から上院議員となつて、時の大統領フランクリン・ルーズベルトの席をおびやかすまでになった。

このロングが活躍した時代、アメリカ南部は貧困層と富裕層の格差が大きく、人種問題も深く根をおろしていた。それに世界恐慌が輪をかけた。そんななかで、かれは遅れた農村を「開発主義」で切りひらいていった。その政策はいっけん社会主義を思わせるものであったが、かれはむしろ世界の社会主義化への歯止めとするためにその政策を用いたという。そのために独断で議会や法を無視してらつ腕をふるった。それが大衆の人気に拍車をかけた。

『キングフィッシュ』にこんなシーンがある。州会議事堂を上院議員になったロングが大勢を連れて闊歩していると、農民夫婦がよびとめて「おれ

たちを知っているか」と尋ねる。するとロングはかれらの名前を即座に口にする（この記憶のよさも武器の一つ）。農民は「約束した道路はまだ舗装されていない」という。これにロングは応じて、そばの新知事に「すぐ手配しろ」と命じる。

これは何気ないシーンの一つのようにみえるが、そこにロングの本領がある。当の農民はその即断に感動し魅了されるが、それは同時に法や民主的ルールを無視することにはかならない。ロングは、こういう手口で大衆をひきつけ大衆もまた強権をふるうかれに依存し、それを誇りにしたのである。三宅は、ロングの「SOWプラン」を「分配主義の経済改革を装っているが、その本質は……〈大衆動員〉と〈独裁化〉の政治装置であった」とのべている。この時代、世界恐慌からヒトラーやムッソリーニといった独裁者が誕生したが、同じようにロングも民主的な

選挙などを巧みに利用しながら着々と「アメリカン・ファシズム」を築いていた——そのことを三宅は丹念に分析している——アメリカという、いつけんファシズムと相反するようにみえる民主主義社会の土壌からも第二のヒトラーは生まれてくるのだ。そして、それはいまの日本の政治的な土壌と似ている。生い立ちや環境は違うものの、ロングの政治手法がどこか石原都知事に似ているようにみえる。石原の都政になってから、新しい都営住宅が一戸も建設されていない。そのこと一つとっても、かれは貧しい都民の味方では決していない。地道な都政の活動は放置したままだ。それなのに、ディーゼル車の排ガスをつめたベットボトルをふってみせるとか、東京マラソンをお祭り仕立てにするとか、オリンピックを開催しようといった子どもだましのパフォーマンスで、都民はめくらましにあつて、それに喝采している。ま

た、石原は「東京から日本を変えていく」をうたい文句に、法律や民主的ルールを軽視して国家主義的教育を強制している。その政治姿勢は、一地方の「首長」としてのそれというより、一国の「首相」としてのふるまいであり、一地方の「長」でありながら、そこから身をのりだして、一国の「長」たらんとしている。そこには当時のロングとは違い、七十四歳という年齢の壁からくるあせりもみられるが、そのことでいつそう独裁への道に拍車をかけている観がある。そして、それを後押しする「都民」も一緒になって地獄への道を駆け下つていくこうとしている。——『オール・ザ・キングスメン』という映画とその批評の作業をおし、わたしにはそついう日本の現在もすけてみえてくる。